

日本往生極樂記の撰述について

中 尾 正 己

往生伝類が平安朝民間布教者および信者に關する極めて重要な史料であることはいうまでもないが、これらの記録に編者である僧侶文人等の手によつて主観的な整序・潤飾を加えられた過程を明らかにすることがこれらの記述を生かす第一歩でなければならない。（井上氏後掲書）このような観点からまず保胤の極樂記をとり上げてその一端を伺うことにしたい。

極樂記にはすべて四十五名の往生人の伝が記載されているが、保胤はその素材を国史・諸人の別伝および故老からの聞書に求めたという。このうち前二者によるものについては原典との対比から素材の撰択、引用記述の過程およびその態度について或程度明らかにすることが出来る。保胤が直接国史を参照したと思われるものに太子・行基・善謝・円仁・隆海などの各伝があるが、中でも善謝・隆海の両伝は国史の卒伝にほぼ完全に依拠したもので他はむしろ他書に拠っている。現存の六国史には四八七名の卒伝（僧侶の伝は三一名）が収載

されているが、この間における保胤の撰択の姿勢を伺うために保胤が拾い残したものについてまず以後の往生伝がどのよ
うに依拠参照したかを見ることにする。続本朝往生伝の大江
音人・僧正遍昭、拾遺往生伝の壹演・藤原良相・護命・和氣
真綱、後拾遺往生伝の清和天皇などがこれに当るが、このうち
音人は三代実録の卒伝に官人としての記録があるのみで、続
往生伝はその記述を他書によつてゐる。壹演の三代実録の卒
伝には往生の証したる瑞相記事を欠き、阿弥陀信仰について
も特に記す所がなく、拾遺往生伝では「觀念内凝、遷化西去」
という一文が付加されている。良相については三代実録に弥
陀信仰について明記されているのみである。続後紀の護命の
卒伝には「忽聞微細音声髻髯院裏、可謂淨刹所迎天人之衆」
と瑞相灼然たるものがあるが、弥陀信仰に關する記事を欠く
ため拾遺往生伝では「正心念仏」なる語を加えて補つてゐる。
又国史に「天人之衆」とある所はむしろ兜率往生を思わせる。
同じく続後紀の真綱の卒伝には「無病而卒」とあるのみで拾

遣往生伝では文飾を加えて往生伝風な体裁をとっている。清和天皇については三代実録は臨終時の異相を記すが、弥陀信仰に関する積極的な記事を欠くため拾遺往生伝では「繫念弥陀、経行座禅」とこれを補っている。結局原記事不明の遍昭を除く六伝の中、音人・恵演・良相・真綱の四伝は往生の明証たる瑞相記事を、残る護命・清和の二伝は弥陀信仰記事をそれぞれ欠いている。従つて各往生伝作者はその記述にあつて他の伝を引くかないし編者自身の手による何程かの潤飾を余儀なくされている。翻つて隆海と善謝の国史の卒伝を見ると、前者は弥陀への帰依、往生を示す瑞相が具体的に明記され、後者は「遂生極樂、入同法夢」と極めて短句ながらこれらの条件を充たしており、他の往生伝が依拠したものとの間には明確な一線を画すことが出来る。次に往生伝から離れて更に広く六国史中の伝記を通観すると、臨終時の異相瑞相の記されているものに道昭伝・鑑真伝（ともに続紀）などがあるが、前者は願生思想が明らかではなく、後者は往生の証しとしての具体性を欠く。このように見てくると、保胤が広く国史を渉獵してわずかに善謝・隆海の二伝を摂取してこれに依拠したということは誠に明確な意図と基準にもとづくしかも極めて厳密な撰択と評すべきであろう。

次に諸人の別伝に依拠するものについて同様な考察を試みる。極樂記では太子・行基・円仁・増命・空也の各伝がこれ

に相当するが、このうち特殊な事情にある太子と行基を別にする他の三伝はその原典（慈覺大師伝・扶桑略記所引伝・空也誄）に往生の証、弥陀信仰ともに明瞭である。（極樂記の円仁伝では瑞相記事の後半は他書に拠っている。）一方、極樂記成立以前にすでに存在したと考えられる他の諸伝記について見るならば、叡山大師伝・天台南山無動寺建立和尚伝（又はその祖本）・大和上東征伝恒貞親王伝などは極樂記以後の往生伝がそれぞれ依拠参照しているが、本来の伝記に没時の記事を欠く恒貞親王伝を除いて他の三伝には異相瑞相記事が見られる。しかし信仰行業の点については叡山大師伝は弥陀信仰が稀薄であり、残る二伝ではむしろ兜率信仰が強く打ち出されている。その他の諸伝を調査した結果目に止まつたのは智証大師伝でその臨終記事に「念仏懇至」「満山大小聞天樂満虚空」とあり、保胤が採らなかつた事情は不明であるが、全体として密教色が強く、「天樂」とあるのは兜率往生を連想させる点注意を要しよう。いずれにせよ保胤の素材撰択において重要な基準をなしたのは信仰の行業とその内容、および往生の明証であつたことは明らかであつて、広い材料収集と極めて厳密な撰択のなされたことがここに知られる。極樂記所載の四十五名の往生人についてこの点逐一検証して見るとその徹底さにおいて保胤が倣つた中国の先行往生伝類にも見られない程のものがある。

次に極樂記の記述態度を見ると、史的著述としての史料の価値に欠ける所があるものの、往生人の行業および往生の相の記述に関しては依拠する文献の記事との対比からその的確さが評価されている。従つて他の往生伝にまみ見受けられる主観的な潤飾をこととする態度は少くともこれらの記事については原則的に認められない。たとえば先に上げた相応や鑑真の場合のような不都合な兜率信仰の部分は無視抹殺して弥陀信仰の部分だけを取り上げて記載するという記述上の恣意の撰択を犯すことなく、不都合な部分があるものは取り上げず、もし取り上げた場合には原典に従つて忠実に記すという姿勢を持っている。保胤にとつて恣意の潤飾を行つて往生伝風の体裁を作り上げることとは何の意味も持ちえなかつたのであろう。

明らかに国史・諸人の別伝に依拠したものの以外に極樂記には先行文献不明の約三十数篇の伝が存在するが、この中にはいわゆる故老からの聞書も相当数存すると思われる。これらについて保胤がいかなる撰択や記述を行つたかはもはや今日では明らかにするよすがもないが、これまでに見て来た撰述の態度がここでも一貫していたであらうことは想像に難くない。この推測を補う一助として、極樂記撰述に先立つ往生者で、後の往生伝に収められこれまで考察の対象とならなかつた十数名について調査を行つた。これらは極樂記撰述当時ま

ではその往生についてのなんらかの記録が存在した証のないものであり、従つてあるいは人々の間に伝承されて保胤の触れる所ともなつた可能性の十分考えられるものである。しかしその結果、この中で極樂記撰述の基準と一応想定されるものと照らしてそれに合致するのはその入滅の時期が極樂記撰述に先立つ可能性も十分ありうる良源の伝（後拾遺往生伝）のみであつた。かくして極樂記に当然記載さるべくして漏らされた例を見出すことが少くとも今日において甚だ困難であるということは保胤の材料収集の広さと撰択の厳密さを物語るものと考えて大過なからうと思われる。

以上保胤の撰述の態度についてその一面を見たにすぎないが、それを通して極樂記の思想がいかに把握されるべきかという問題は次回にゆだねたい。

参考文献

井上光貞 『往生伝 法華驗記』

『日本古代の国家と仏教』

大隅和雄 「聖について」(『日本宗教史研究Ⅰ』所収)

重松明久 『日本浄土教成立過程の研究』